(英和語羅馬字對譯挿入)
A translation to the English from the Japanese contained.

女學雜誌

驛遞局認可　明治十九年二月十三日　毎土曜日發兌　第九號

此の繪の說明ハ本紙中に在り

The Engraving illustrated in another page.

東京京橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第九號目次

●官衙と學校との彙聞●女學叢誌第八號叢譚を讀む●女子に猛省を促かす〔承前〕●いろは游戲●王の園●西洋謎の解●西洋謎の新題●和英語羅馬字對譯〔いろは骨牌〕●英學手引草●山本ふく女の奇行●表壽傳●澤橋か母幷其子兵太夫の話●宮城野信夫の實傳〔承前〕●北條英時の妻赤橋氏●化粧のまき●筆のまに〳〵●源頼義上洛の道の記●女用文●蛛の獨り言●机の塵●內外雜報諸廣告

明治十九年二月十三日

本誌代價表

壹册	正價金四錢	此郵税壹錢
拾册	同金三拾八錢	同拾錢
二拾册	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾册	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾册	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾册	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區內郵税不申請

女學叢誌毎土曜日發兌表

明治十九年

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一行至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一行至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一行至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一行至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に內規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ〇郵劵代用ハ御斷り申上候萬一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞
郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替劵を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○官衙と學校との彙聞

◎高等女學校　昨年の十月文部省にて出來し同省の第十一めの年表を見しに高等女學校の事を記されたれば茲に和らけて其意を申し侍らん

女子敎育の其緒ちに就き高等普通學の科を修めんとする者益々多くなりしに各府縣にハ高等の女學校の設け誠に少なく其敎への筋も全たく整備ず其内高等普通科を教ふる者ハ稍やく本省の支配なる東京女子師範學校に設くる所ろの豫科あるのミ左り乍ら其主旨ハ元來女子師範學科へ入る者の豫科なれバ固より立派なる高等女學校の手本と爲す者にハ之れなし是故に昨年七月之を廢し更先て高等女學校を女子師範學校の内に設へ新たに其教の規りを撰み定めたり而して其本旨ハ彝倫道德の敎を本となし婦女を優良に導びかんと欲せし故に其學科ハ特て身を修むるの科を重くし其他の科ハ概むね御國に有り來りの者を先とし務めて優美嫻雅風俗に移らせんとと爲にき○是に於て地方の標準となすべき者の形はじめて出來致したり。去る故に遠からず其效果を見るとありぬべし

本年の末生徒の現たりある員ハ豫科より轉入し者と新たに入學せし者とを合せて百一人なり其敎員ハ總て本校の敎員を兼帶にし經費ひも亦た本校にてなしたれバ之を茲に分ち記すとなし難し

東京の外の地にて女學校の体裁を爲し而して高等普通科の敎を授くる者ハ京都○群馬○栃木○山梨○岐阜○德嶋○都合一府と五縣なり其敎員ハ男子二十四人女子三十七人生徒ハ三百四十九人○卒業の生徒ハ三十四人ありけり以上府縣の女學校ハ御國の女學校の嚆矢にして今の有樣にてハ最も盛りなりとハ申し難けれども其敎への規り各々訂正したれば婦女の德を薫陶ばかりならず裁縫圖畫音樂等の稽古も備ハりて先づ見くるしからぬ次第に至りしとぞ

◎行啓　皇后の宮ハ去る四日華族女學校へ成せられたる御摸樣を承はるに午十二時三十分ころより御歩行にて同校へ渡らせられ暫しの間御休みの上初等中學第一級生の和文（敎師下田歌子）上等小學第三級生地理（同堀江善子）上等小學第二級生の歷史（同佐野安子）上等小學第一級生の漢文（同並河尙鑑氏）初等中學第三級生の算術（同森田勝子）を御巡覽遊ばされ後ち校長谷干城君其ほか幹事敎師一同を御前へ召され織物を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

下し賜わり生徒一同へは和文教科書日本文明史略を一部つゝ恩賜相成り午後四時三十分ころ御還啓あらせられしよし

◎孝女賞與　下總國豊田郡田下村三十七番地の平民折原平右工門の孫よし(十二年一ヶ月)が茨城縣よりれ賞に與かりし子細を聞くに傳右工門は固より貧しき農家にて澤山の田地も有ざれば長男長三郎と嫁のすみ及びよしに農業を營なませ自分夫婦は年老たればとて家の片隅に僅かの商業を爲して漸く其日を送るうち去年の一月より嫁のすみは産後の肥立あしく百方手を盡せども更に其驗じなく二月ころより枕の舉らぬ大病となりしも所夫長三郎は糊口に逐れて思ふ儘に看護もならぬをよしが察して父さん私しが看病しますゆゑ家にれ心を置す農業してれ藥りの代を得て下さいと夫よりよしは母の枕邊に在て甲斐々々しくも醫藥に心を用ひ又は母の手足を撫さすり三度の食事も種々と調のへ暇あれば父母の衣服の洗濯より家の事を取りまかなひ友立が來りて近村の祭りに誘ひ勸むるも少しも心を動かさす始終かはらざりければ人皆長者も及はぬ行爲なりと感じ賞ぬものなかりしが果して縣廳へ聞へ式の如く賞與せられたりと云ふ洵に奇特の少女にこそ（賞狀は烈女傳の末段に記す）

〇第八號の叢譚を讀む　中嶋ろく子

學び淺く智たらぬ身にて嗚呼がましく貴重の叢談を汚し候は恐れあるに似はべれど丹治すゝ子の卿のものせられし文を讀て覺ろに感じ候まゝ其驥尾に附て申し上候は夫の亞米利加の貴婦人が申されし如く御國の婦女子は動もすれば其身の爲めや覺悟よ相成る書物は之を忌みさけ只箇浮たる方へ目を注き候と實に慨かはしき次第に之れあり現に新聞を讀む女子の有樣を窺かひ候に多くは情死とか又は作り設けし續き物語或は淫らなる行爲ある男女の事などにのみ心を傾むけ耳を澄し幻の如く相成居り少しよても學藝とか又は道徳ちに關はり事項に至れば之を捨て手よだに取らず早く今日の續きを見たしと云ふ思もち有は皆な樣の知らしめす所ろに候らはん、ろもく文明の培なひたる新聞を見るすら斯る有樣に傾むきし其所以を尋ぬるに種々の原因あるべしと云ども多くは左の事が手傳をるならんと思ひ侍るなり

第一　芝居狂言
第二　寄席

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第三　三味線の稽古本の文章

第四　踊りの稽古

第五　書籍の詞ハと常の詞ばとの異なる

第一御國の芝居ハ其原質浄瑠璃本より組立來たり多くハ男女の中合を作せしがゆゑに如何に後の作者が之を除かんとするも局まる所ろハ之を免れず忠臣藏にも阿輕勘平の道行あり妹背山にも阿三輪が男を慕ふ段あり或ハ女子が男の爲に辛苦して添遂け或ハ男子が女の故に身を果等芝居毎に此有様を含み居り候事ゆゑ其俳優の技藝が上手にして其身に感する時我身に慥かの力らなき節ハ遂に其に化せられて其良心を乱す原因に相成様にも覺へ候而して只だ其技藝に感じ其場限り良心を乱し候なれば深く咎め申すに足されども或ハ之が爲め其俳優を慕ひ又ハ其淫らなる芝居の様を自から實に行なひ見んとするの害とを生ずる場合なしとも申し難し

第二寄席ハ何れの地までも嘲間めきたる者の出席して一圖に人々の心を嬉しましめんと是のみ心がけ候ものゆゑ十が十まで女子の爲にハ害に相成申そべきの何と申せば親子の間にてハ聽も苦しき咄し又ハ○○○○なまめける男女の睦言を形ちに見せ或ハ都々逸とか又ハ端唄となん呼る淫聲を專ぱらにして人の心を動かす事のミを勉め一も學藝の端し道徳の事ハ打語られず其上男女入り乱れて見物する席亭なれバ自然ら身の謐しみを損ふ媒介にも相成申すべし

（以下次號）

○女子に猛省を促かす（承前）　富春漁父

以上に由て之を考ふるに紡絲組織其他手術等の業に於ても亦た男子を婦人の代りに用ひて優る〻とあらん英國に於てハ早く已に之を實驗て一様の費用に關りて見る時ハ差引して男子の業を以て優れりとし婦人ハ其家の取締りと徳義を全たくするに欠べからざる者となすを以て據ころなき事故あるに非れば必らず其家に在りて之を守るべき者と定めたり是れ吾儕等の最とも望む所ろになん

婦女の儲くる利分の誠に少々なる事ハ既に前号に於て之を論説いたり特に其所天と同じ業をなすが如きハ所天の賃金を減らす譯あるを以て其細少き利なると言ふに勝さる者あり且つ夫れ婦人の其家に在らざる間ハ其家に不都合を生ずると少くにあらず大凡人家の事物に就て之を考ふるに婦人が他の業を爲せば左のとハ如何となすか一に家屋に氣を附ると二に衣服の洗濯及び仕鉡方三に食の用意四に學校より歸りし子供の世話幷びに病氣の節の看病等此等ハ最とも大なるヶ條にして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此他尚は雜事を擧なば異に夥多しき數あらん一家の妻君にして斯の如く持前の職務あるに之を捨て賤しき雇ひ婦となり其身自由の天性を失なふハ實に文明國人の爲さゞる所なり

婦人の其職業を止て家に歸るに及びてや所夫いまだ歸らざればバ家の事をそるの餘力なく又時間なく而して家の内を見廻せバ塵や芥に汚れ足の踏場もなく火鉢に一點の火もなく釜に一滴の水もなく已に疲れたる氣力を取かへせんとする晩食の仕度もあらず又他の一方に就て見れバ其父の常に家に在ざるが爲に其子女ハ僅かに其父の顏を知のミにして其父に對して敬禮親愛の有樣をなさず其母も亦た兎もすれバ所夫を他人同樣に視做となきにあらず故に所夫ハ快よからぬ情を發し俄かに其友立と共に茶屋に至りて夜ふくるまで酒を飲み而して歸宅するの情況を呈ハすに至るべし且つ其友立の之に伴なふ所以もまた豫て約束せずして殆んと同樣なる者あればあらん（未完）

◎歐米女學の枝折

○いろは游戲　（承前）　孤月嶺風樓重譯

阿花姐（チ）妾ハちと愛する者を同じくします彼ハ盟約を變せず知識ありて忠愛の志ざし深く候らへばなり妾ハ又彼を惡みます力量を好み智惠に誇り知己朋友に見捨られ候ゆゑなり其上彼ハ妾が名を取て偏跛ちゞれ髮近眼に附け矮雞狗に施こし又地震と申して月給取を惱ますと往々あり彼が名ハ千代八と云て筑前より參れり

阿辨姐（リ）妾ハりと共に妾が愛する者を愛します其故ハ彼ハ律儀者にて利發の上理のよく譯る者で在ます然し妾ハ又りと共に彼を厭ひます彼ハ吝嗇に過ぎ利慾にふけり理屈ばかり申します故なり彼ハ妾が名を力士に與へ又ハ嫉妬に名づけ兩替屋に命し栗鼠林檎までも之を附たり而て彼ハ名を林濺と申し陸前の者で御坐ります

阿燕姐（ヌ）妾ハぬと共に愛を同じくします何と申せば彼ハ幣帛を採り叩額て神を祭りぬからず事を爲せバあり妾ハ又彼を忌ます其譯ハ彼ハ拔荷を賣買し盜人の宿もし又妾が名を拔作に名け鵺鳥五倍子繡等にも名けたり彼が名ハ縫之介と申して沼津の產れなり

阿光姐（ル）妾ハると同じく愛する者あり其次第ハ彼ハよく留守を勤め類なき事を考がへるづばをも發明したればなり去り乍ら亦た嫌ふ所ろあり彼ハ永らく流浪し流人ともなりた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ればなり彼ハ亦た妾が名を取て縲絏流刑と號し又類例もなき悪名を呼なせり彼ハルイナポレチンの家來にて呂宗より來り名をルーソーと申します

阿眞姐(チ)妾ハ○をと倶に愛する者が同しで在まそ如何と申せば彼ハ雄々しき擧動ありて而も壯時りなれバなり妾ハ亦た彼を厭ふとあり踊りを好み滑稽たる事をなし煽動に乗る者なればなり而して妾の名を以て女太夫をてん婆等に附け鶯鷲蛸蛇獺などより秋岡茵にまで名づけたり彼ハ折助と申して一昨尾張の國より參りしとぞ

阿啓姐(ワ)妾ハ○わと愛する者を等しふします彼ハ常に笑顔して俳優をなし悪ひれず殊に和歌を善くすればあり妾ハ又彼を遠ざくる事あり彼ハ悪巧ミを爲し横恣にて悪かしこくわ○○○んぱくにて譯がわからず其上妾が名を鷲とし鰐とし和茅山葵までに用ひたり彼ハ名を和吉と云て度會の者なりしが久しく華盛頓に渡り綿の培養を覺へ近頃かへりしなりと

阿鳥姐(カ)妾ハ○かと愛を同じくせん如何と申せバ彼ハ金貸にて掛引を善し家内を圓く治める加限を知ばなり然し妾ハ之を悪む事あり片ひいき。片意地頑愚にて背後言を申し常に賭とを好みて借をこしらへ悲しみ居ばなり彼又妾が名を以て髪結床傘屋金物屋鍛冶屋軽子等に名づけ尙は鴨雁海鷗より比目魚梭魚南蕃爪蕪根等に及ぼしたり而して彼が名ハ嘉七と云ひ加賀の金澤より來りし者なり

○王の園

此の游戯ハ言舌を爽やかならしむる爲の敎へなり之を爲んにハ先づ童女圓く坐し初の女子次の童女に鍵を授けて(何にてもよろし)曰く。貴女に王の園の鍵を賣ますと次の童女之を受て次の童女に贈りて。貴女に王の園の鍵を結べる糸を賣ると第三の童女又之を第四の童女に授けて。貴女に王の園の鍵を結べる糸を噛む鼠みを賣ると第四の童女之を受て第五女に贈りて。貴女に王の園の鍵を結べる糸を噛し鼠を捕し猫を賣と第五女之を受て第六女に與へて。貴女に王の園の鍵を結べる糸を噛し鼠を捕りし猫を噛む狗を賣と右の如く順々に其詞ばを増し縁ある事を以て之を云なり此の游戯ハ王の園に限らす何にても宜しければ此方法に由て他の趣向を考かへ給ひかし

○西洋謎の解

本誌第六號謎の解投書方五十七名の内解當するハ左の如し

●(四)昨日　千葉お菊姐○芝山本おとみ姐○横濱松の舍○非
馬山崎れ松姐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●(五)莫大小　千住お由姐○本所常盤姐○神田凪山人○牛込津田○淺草閑人

○數學プッザルス

●(四) 九十九個と一個食し者が何もゑよ勝しと云に991の内の91の數を下段の右に書き91なれば合して1ゆゑ之を左りに書ば卽ち1(百)と91(十)なるべし千束村のみきをさんが九十九に一なりと考へて投書せられしが妙は妙なれども洋算になりませんゆゑ解當とは致しません

●(五) 二十九日を費やす

○西洋謎新題

(六)余は小さき玩具なれども若し力らを猛烈する時は一大都會も目の前に亡なるべし且つ余が名の上下二音を捨れば人家日用食物の名となり又上下の二音のみ用ひなば庭や游園に於て人々の愛る物となるなり

(七) 口なくして天下の有ゆる事を喃喋足なくして天下中に行き耳なくして能く聞き得る者は如何

○數學プッザルス新題

(六) 十二の半分は七ツなり其故如何　○答

(七) 九は何れの數にも離れかたき者なりと云ふ何ゆゑに他の數にまで及びをるか　○答

◎和英語羅馬字對譯〔いろは骨牌〕

(和) 老ては子に從へ

(羅) Oitewa ko ni shitagaye

(英) Old man should obey his son

老タル一 人ハ二 子六 バナラヌ 從ガハ五 彼ノ三 子ニ四

(和) 破れ鍋に綴ぢ蓋

(羅) Ware nabe ni toji buta

(英) A fastened lid for a broken kettle

トヂ四 ブタ五 向テノ三 ワレ一 ナベ二

(和) かせぐに追付く貧乏なし

(羅) Kasegu ni ottuku binbō nashi

(英) Poverty cannot overtake dieigelnce.

貧乏ガ一 得ヌ四 追付キ三 カセギニ二

◎内外烈女傳

○山本ふく女の奇行

うえて見よ花のそだゝぬ里はなし心からとて云々の歌の如く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如何なる木草も植て手入すれバ美麗き花さき實を結ふハ自然の理なり玆に父母や教員の教へ導びきのよきに由しとハ云へ實に殊勝の少女ぞ現ハれぬ

京橋區水谷町十五番地簞笥商山本赤二郎長女ふくハ未だ九才に足らざる幼き娘なれ共天性孝心深く苟も父母教師の教に違背せしことなく能く日々精をだして日本橋區公立坂本學校へ通學怠らざりしゆへ父母ハさらなり教師も取分けて目を懸しが或る日ふく女ハ左足に足駄をはき右足に駒下駄をはき登校するを他の生徒ハ是を見て嘲けり笑ひしを受持教師酒井くに女が何心なく是を見しにチンバのはきものを訝しく思ひ他生の嘲笑を抑し止めおふくさんハ常に行儀のよひ

百三十九

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

子なるよ今日に限りなせ片チンバの下駄をはいたのと咎められふく女ハ顔あからめながら今朝學校へ行かふとする折父さんハ道がわるゐから足駄をばけと申し母さんハさほど道がわるくなゐから駒下駄の方がよいと申しましたから母さんの言葉に隨へば父の命に背き亦父の命よ從へば母の言葉に違ひ常に先生の教にハ父母の仰に違背てハならぬとの事ゆゑ兩親の御心を損せぬやう兩方片々つゝ履てまいりましたとの應へに教師もほと〳〵感心し其日優劣行狀點に優點を與へしかば先に笑ひし他の生徒ハ顔赤ふめて耻しとなん末たのもしき少女にこそ

〇表書傳（九）

〇澤橋が母幷其子兵太夫の話

其以前加賀の前田家より毎年八丈嶋浮田家子孫の許へ資用の爲に小金幾星丹藥幾包其外瑣細の物件定數有りて目錄の如く公の官吏に付して八丈か嶋へ達せし事有故如何と問に澤橋兵太夫といふ者より起りたる事なりとぞ豊臣家未ゞ繁昌の頃前田家の先祖大納言利家の女を太閤秀吉養女として浮田秀家に嫁せしこと有しが慶長年中關か原の師散じて後秀家は石田方の渠魁にて有しかば死罪に處せらるべかりしを島津家の哀を乞われしにより死一等を減じて秀家幷に其子八郎を八丈か嶋へ竄逐せらる八郎に乳母有しが此時疾くに逃れ去り昨日に變る今日の空譜代恩顧の郎等も皆何處へか逃果て秀家親子只二人り身は罪人の群に入り愈渡嶋と定まりしが玆よ浮田家に召仕れし某しといふ女房八郎君の幼少にして乳母に離れて遥々嶋に赴むくを深く泣悲しみ心狂ふ迄憂ひをりしが心弱くてハ叶ハじとや思ひけん徒跣にて官廳に詣り切りに八郎に附きて嶋よ到らん事を願けれども制禁有し程に是をゆるされず女房此上ハとて已に自殺せんとしければ官吏等之を押さへて偖て議しけるハ此女房目前にて見殺に爲さバ後に上よ聞えん時不便に覺し召しなど一應は糺わざりしと若し御咎も有なん其時に至りて。はなじろむより寧ろ今糺ひ奉りて御旨に任そるよハ如ずとて當時の官吏等之れを公けに糺ひしに女なれハ苦かるまじ嶋へ遣し候へと命下りしかば女房の悦び限り無く秀家父子に附隨ひて八丈嶋へと赴きけり女房嶋へ赴くに臨ゑ浮田家の夫人當時前田家に在そに到り涙ながらに別離を述べて曰ハく妾ハ八郎御曹子の御事餘りに不憫く候へバ御供申して嶋へ參り候此場に臨み一トつの御願といふハ此子を御側の人へなりとも仰付られ候て養育なし下さり候へとて我子の末

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

た幼稚なく乳房離れぬ幼児を心強よくも着捨てゝ今は早心に懸る雲も無とて出で去りぬ浮田家の夫人ハ事の不意に驚ろかれしかど亦熟々と彼の女房を思へば其忠其義例古昔に多からねば一向感歎に時を移されしとぞ其後夫人は常に其子を膝下に置て撫育され此子が母は身を捨てゝ我子八郎が先途を見届けし者なれば此子は我子なるへし否我子なりとて所生の如くせられしとぞ然れども彼の女房の夫即ハち此子が父は如何なる者なりしか其人は辨らぬよし氏は澤橋となん呼ばれければ成長の後夫人より深く前田家へ付託せられしかば彼の家にて所領給ハり澤橋兵太夫と名乗ける

（以下次號）

◎宮城野信夫實傳　（承前）

斯て兄弟ハ志摩と名乗合て數刻打合二人替る〳〵相戰ひ候て程なく志摩を袈裟かけに切付申候姉ハ走り懸りて留めを刺申し候殿様御機嫌斜ならず此二女共に家中の娘に給ハるべしと仰出され候處ろ二女共ハ堅く御辭退申上候て御請けを申さず父の敵志摩を打候事元より罪遁れず候願くば如何様とも御仕置に仰せ附られ候様に申上候ゑば猶以て御感心の上瀧本氏二女に向ひ委細様子を申し聞け殊に大守の御意に違背申べくに非ず某もそちたちの劍術の指南なれば彼是以て我が申す義そむくべからずと申され候得ば漸く了簡に隨かひ納得仕り候依て之御家老高三万石伊達安房ノ守へ姉娘を引取候て當年十六歳高知らず大小路權九良殿妹娘を引取候て手疵養生仰せ附られ候當年十三歳　（畢り）

北條英時の妻赤橋氏

筑紫探題北條英時の妻ハ赤橋相摸守盛時の女にして足利尊氏室家の妹なり英時九州の探題として下向せしのハ妻從て筑紫に赴きけるが元弘三年肥後國菊地次郎寂阿入道官軍に属し英時が博多の館へ寄來て合戰し寂阿戰敗れて討死しけると云へども九州の地頭甲乙人ハ國々の軍勢兵士の先鋒を大方ハ官兵に加はりて二度博多の館へ押寄せて合戰し英時が軍戈を倒にし寄手に降し合て英時を射けるにより同年五月英時妻子を關東へ還し其身心よく軍して廿五日といふに自害して失ぬるよし聞えければ妻悲に堪へず同じく刄に伏して死なんとせしを再く人々にとゞめられて徒然に日を過しけるに關東も六波羅も滅び父の盛時も自害せしと聞て守る人のひま求め淵川に身をなげんと泣哀みぬるを足利尊氏卿の北方懇ろに止め給ふ由ありて尊氏卿の亭に申預りてをかれけるに世にもたのもしげなく世を恨みて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しらざりし心つくしの古へを身のおもひてと忍ぶへしとれと打なかめて建武元年五月廿四日夫英時の一周忌の作善かたの如く營みて其夜いさぎよく自害して失にけるを夜明て人々是を見て驚ろきさわげどもかひなし終に衣笠山の麓にて烟となし卒都婆を造立ありつれとも天正の末の乱にあふて卒都婆倒れ墓壞れて今は其地も定かならずとのや等持院舊記に見ゆ　玉石雑志

○諸葛亮の妻　牛込　安井京子稿

諸葛武侯隆中に在し時客至れば妻に命じて麺を造り之を欵應となしゝが坐の未だ暖たまらぬに持來るゆゑ孔明其早きを怪しみ窃かに之を窺かひしに二三の人形麥を斫り磨を遥らして恰かも活物の如くなりければ之に由て其術を求め夫の有名なる木牛馬を案じ出したりと云ふ

茨城縣下総國豊田郡田下村
平民農傳右エ門孫　折原よし　十二年一ヶ月

母長病に臥し進退意の如くならさるを爰に二十二ヶ月此間能く心を病者に用ゐ看護孝養怠たらざるを實に成人の如く其行爲洵に奇特なるに付爲其賞金二圓下賜候事

明治十八年十二月六日

○都鳥の弁

伊勢物語のふるき注釋ともには都鳥を鷗とはいはず鷗とさだめたるは北村季吟拾穂抄加茂眞淵古意沙門契沖臆斷高田與清十六夜日記殘月抄山岡明阿武藏志料等なりさて今は都鳥と云へは鷗の事と定まりたる如くなれと今も國によりて都鳥といふは鷗とは異なる鳥をいへるよし都鳥考に詳かに弁せり猶其序に佐渡の土人の都鳥といへるは鷗にあらざるよし鵬齋もいへり又衣川長秋　宣長門人が出雲の大社に詣てし道の記田鶴の日記と云へるに日野川にてさつをの射とりたりとて都鳥をもて歸れり古今集に白き鳥のはしとあしとあかき河のほとりにあそびけりとあり今見るに白き鳥とあれともかしらと羽の表は黒くて羽の裏背腹眞白なりしろきといはれしは舟におとろきなとして飛し時羽の裏背腹の白きを見ていはれしなるべし嘴は紅足は濃紫の色なり伊勢物語には鴫の大さなる水の上にあそびていをゝくふとあれとたはきさ小鴨の如くにて水にはうかばざるものゝよし其なりきあさるさまは水鳥の如しといへり伊勢物語はつくり物語なれはかゝる事實のあはざる事もあるべしと見へたり是等によりて見れは都鳥考にいへる如く一ひきは鷗とのみもさだめかたし猶今都鳥考にいひ殘したる考

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を記して弁せんにまつ水のうへにあそびつゝと伊勢物語にハあれと古今集にハ川のほとりに遊ふとあるハ此方よろしかるべしさるハ水の上と書たりし本によりて水のうへを仮字にかきなせしにて水の上とのきしも猶川のほとりと訓むべしさるハ嘴と足とあかき鴫の大さなるとなる詞をよくおもふべし水のうへにあそぶハ打見るに嘴の赤きハ知るべれど足ハ見もべうらず且つ水に浮へる鳥のさまを云はんに鴫にたとふハ似つかはしからず鴎たかべなとこそ云ふべけれ又夫木集に鴎と都鳥とを別にわけてよめる歌ありてそのさまも亦かはりたるなとも考へ合そべしいつれにまれ強ち鴎と定めたる説ハいかゝあらんかゝる一種の鳥ありといへる穏なるにハしかざるべし聊おのれか考をものしく世のものしり人に質まつるになん

○英學手引草

近頃英學大に流行はじめ小學校に於ても讀すべき旨文部省より達しありし程なれば往すへます〳〵盛りになるハ今更ら申そ迄も候ハじ然るに片田舎にて良き教師に乏しき方々又ハ都門に在りても改ためて學校に入るを愧かしく思ひ又ハ家事忙しきゆゑ心ならずも其儘うち過き給ふ貴女方なしとも云ひ難し此の開けゆく御代に當りて其志さしを遂給ハさるハ實つに吾儕女學叢誌記者の遺憾に存する所なり是を以て本號より英學手引草の一項を設け童女方の爲に英學の門を開き他日堂奥に入人の手引を爲んとす

○大凡英學をなさんとそるにハ文字を先に覺へ次に母字と子字と合して活らく詞ばを覺ふ此れ其大体なり之を別れバ綴字法短聲長聲動詞名詞代名詞景容詞と各々法もあり又符合など種々あり其ハ號を追て之を詳らかに説明すべし

○西洋文字幷び讀方

エー	ビー	シー	デー	イー	エフ	ヂー	エッチ	アイ	ジエー
a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
ケー	エル	エム	エン	オー	ピー	キユー	アール	エス	
k	l	m	n	o	p	q	r	s	
テイ	ユウ	ウイー	ダブリユ	エクス	ワイ	ゼット	エンド		
t	u	v	w	x	y	z	&		

エー	ビー	シー	デー	イー	エフ	ヂー	エッチ	アイ	ジエー
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
ケー	エル	エム	エン	オー	ピー	キユー	アール	エス	
K	L	M	N	O	P	Q	R	S	
テイ	ユウ	ウイー	ダブリユ	エクス	ワイ	ゼット	エンド		
T	U	V	W	X	Y	Z	&		

エー	ビー	シー	デー	イー	エフ	ヂー	エッチ	アイ	ジエー
a	*b*	*c*	*d*	*e*	*f*	*g*	*h*	*i*	*j*
ケイ	エル	エム	エン	オー	ピー	キユウ	アール	エス	
k	*l*	*m*	*n*	*o*	*p*	*q*	*r*	*s*	
テイ	ユウ	ウイー	ダブリユ	エクス	ワイ	ゼット			
t	*u*	*v*	*w*	*x*	*y*	*z*			

西洋の文字ハ右の如く二十六文字なり之をアルファベットと云ひ日本のいろは四十八文字に同しき者なり上の小字と中の大字を羅馬字と云日本の楷書に當り下の文字ハ伊太利亜字と云ひ日本の草書に當る羅馬の小字ハ多く書籍に印行に用ゐ大字

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ハ此も亦書籍其他標表招牌等に用ゐる字なり伊太利亜字ハ手紙又ハ手記の用に役ふ字と知るべし

以上の外に俗に華文字とて書はじめの頭ら字に用ゐ其他地名人名歳月或ハ儀式等の詞バの頭ら字に用ふ則ハち左の如し

D デー	H エッチ	L エル	P ピー	T ティ	X エクス
C シー	G ヂー	K ケイ	O オー	S エス	W ダブリュ
B ビー	F エフ	J ジエー	N エン	R アール	V ヴイー
A エー	E イー	I アイ	M エム	Q キユウ	U ユウ
				Z ゼット	Y ワイ

○女用文

●新玉ハ。年と云ふ冠辞なり璞ハかならす砥石にかけて磨く物なればあらたまの(砥)とつゞきて其ともしを年に續しなり

●むかへハ年を迎へ人をむかへなどハ我方へ迎へしなり。むかへむかふ。むかふる。むかふれ。活らく詞ばなり。お迎ま人又ハ車などやるも皆なむかへと書なり。むかひの家むかひの山とハ向の家向ひの山にて迎ひの字にあらず

●御さえ〳〵敷ハ。さハやかなるを云ふ俗語なり雅言のさえハ月よも風にも。またさえかへる寒さなど云て寒くそびき貌なり餘寒にさえかへる寒さとハ云を殘暑よさえかへる暑さとハ云ぬなり且つかへるとハ湯の沸かへる氷の涌かへるなど詞ばを切よむる爲に添て云ふかへるあり返る意にハあらず。さえ。さゆ。さゆる。さゆれ。と活らくえ文字も正しくそろ時ハせ行の延もじなれど大体えもじを假り用ゐる故ゑの仮名のミ用ゐしなり

●たへかたうハ。堪レ難にてうハくの音便なり。たへ。たふ。たふる。と活らく詞にて絶ハ。たね。たゆ。たゆるにて人わしのたゆ花のたゆ等よて斷絶するなり之に混ふ可らず

●めづらかハ愛る意めづらしきなども同意珍の字の意に非す

●けふハ今日。きのふハ昨日。よべハ昨夜。あそハ明日。あさて明後日。ゆふべハ夕方。あしたハ朝。此等ハ雅言を用ゐて字音にて今日と云ぬるがよし

●やゝ〳〵ハ。漸なりやうやくとも云ふ俗言のだん〳〵。次第〳〵に。れひ〳〵。になどに同じ俗に得がたき物をやう〳〵得ました。行かたき所へやう〳〵行ましたと辛苦して得し行しのやう〳〵と違へり心得置べしのたきからじてと云ふ方なり

●のどかハ長閑にて和やか靜やか穩かの如し。のどけくのどけし。のどきと活らくのどが詞の本にて餘ハみな形狀の言なり

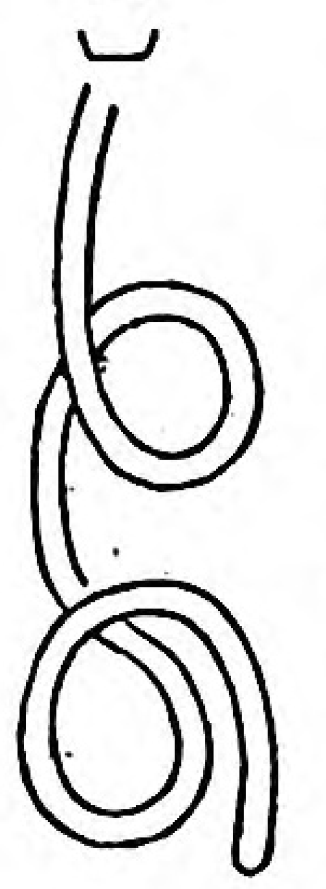
●うながし顔ハ。いそかす樣子なりすべて何かほと云ハ貌を云

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

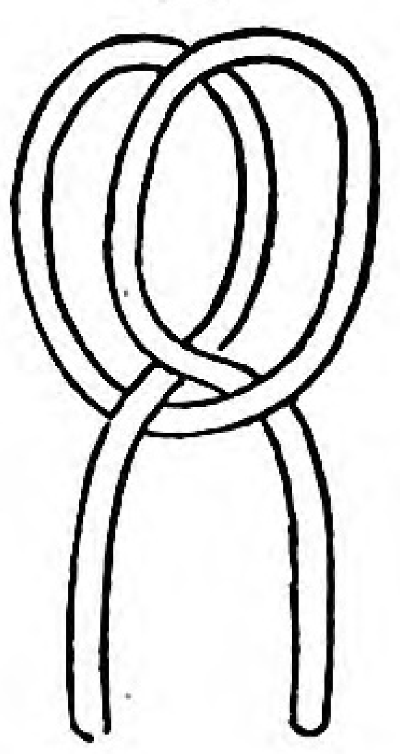
◎女紅

○むすびの記前號の圖　伊勢貞丈

〔一〕

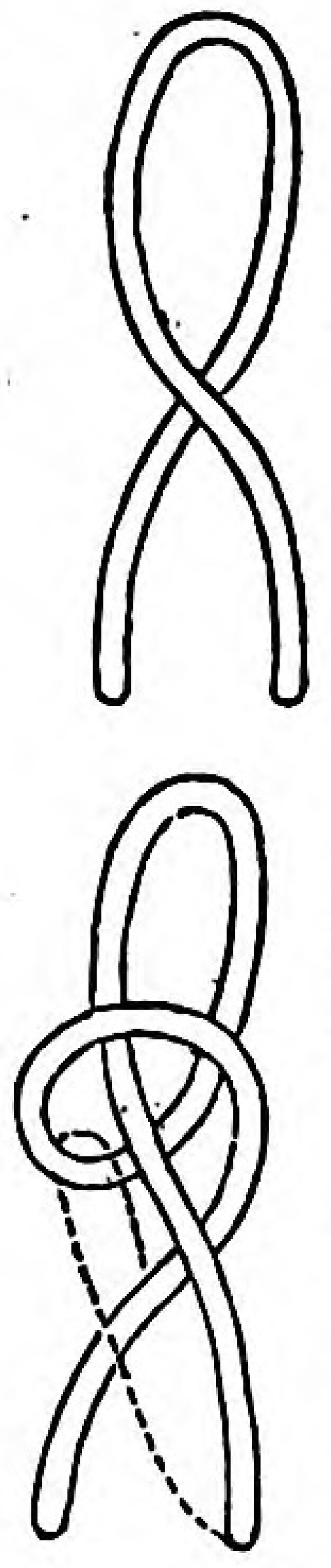


〔二〕



〔一〕圖の如く二ツわなをして二ツわなを重ぬれば〔二〕圖の如くなり鷹の足に山緒をかくるハ此結び方なり〔三〕ハ輿の綱をながえに付るにも〔二〕圖の如くのくるなり

○男むすびと云ハ垣矢來などを結ふときに用ひる結び樣あり



上の圖の如くうち違ひ下の圖の如く輪をつくる…………の如く引通すべし

○圖書　承前

圖書の事ハ吾儕こゝに幾回も重ねて之を云たり今終るに當りて一言申すとハ圖書を嗜なむ人々ハ專一ニ記臆をる物の圖を勉めて書くが最とも善き計策と云べし故に之を爲んにハ先づ善美繪手本を得て之を摸寫而して暫らく之を收めをき次ニ其手本の通りの圖書を手本を見ずして暗ニて之を圖書し其上にて原の書と比較見て其違ひし所ろを看出し之を補なふ事を遁々すれば繪術ハ自然そゝみて遂に巧妙の塲合に至るへじ此れ吾儕の終りに當りて書を好める人に申そ所あり。（終）

◎頴才書畫

本號より十四歳以下の頴才の方々の書畫を記載ます㊟名續々

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

御投寄を願ひます但し時誼に依取捨致しますから左様思召せ

○化粧のまき

猫背をよく見するには身を整理し背を反る様にし我鼻の先と臍と高低のなき様間の低き所ろは木綿か絹にて袋ろを造り之へ綿を入て出尻を隠す腰ばさミの様に其間へ挿み帯を高くそれば一通りの背となりて悪るき風をかくすなり此の如く常々なせば遂には其癖なほり並の背となるなり

◎群芳詞苑

○弓削道鏡　　本郷　大松つま子

ふもとゆく弓削の川みつおほけなく高ねまてとはなに思けん

○道興公　　おなじひと

雲ゐにはすみはてねともかゝやくや心つくしのなみの月かけ

○東京名所百首　　任天居士

○日本橋　(六)

かけ渡し年もまたへぬ橋けたのくつるもこゝの栄えなるらん

○浅草観音　(七)

あさ草の民のかまどのにぎはふは法のけむりのたえぬなりけり

○砲兵本廠在二小石川一　(八)

兵具のかぬちの槌のひまなきは乱れぬ御代のしるしなるらん

○待乳山　(九)

待乳山ゆふこへゆきしたひ人のおとふりてけりこからしの聲

○水神の森在二墨水ノ濱一　(十)

みつはのめの森の下かけ神さびぬたむけのぬさよ纒ふ葛の葉

詞花古今集

富春漁父撰

○曉梅　　埼玉　山本さち子　十四年二ヶ月

ほの〳〵と明ゆく空にかほるなる梅やは春のあるしなるらん

○今様(賀生の行宮)　　眞木保臣

あれ賀生の行宮に。なか月ころに來て見れば。昔しの人はなのみにて。菊のみ千代の御かき守。

○源頼義上洛の道の記

まだ如月の初めつかた凄かへり來る中天の雲間に富士の白く々と雪の高根や吹おろす足柄山の峰よりも其方の空と三嶋江の蘆間よかへる眞鶴の千代を經にけり竹の下谷の丘出る鶯の初音が原に朝霞たなびく煙り瀉しは屋の田子の入海なみ高く滿干の汐に自から浮べる島が原なれや松の陰より三保が崎駒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にまのせて清見瀉ちりうく花の波の關守人いかに吾心ろ沖津しほ瀬の夕なぎに入日うつろふ宇都の山越ゆく道ぞ杳かなれ旅の日數を重ねてや故郷の春に大井川流れの末も遠江往じ永承の下向の時また越べきに思ひきや小夜の中山うち霞かねの音とをく菊川の齢もながき池田の宿今朝うち出る曙に月ぞ殘れる高師山眞砂ふきまく浦風に濱名の橋を打わたり三河國に入ぬれバ昔時日本武尊東の夷を討んとて此所にて矢を作らせ給ひしより矢作の宿の名に殘る昔しの蹤にはる〳〵と來つゝ馴にしから衣と在五中將の詠じけん水の蛛手の八橋ハ都にもなきなのめかな我心から鄙人と鳴海の沖になく千鳥野間の入江の浦つたひ熱田の宮居ふし拜みなほ行そへハ美濃の國不破の關屋に旅ねして夢をも得てそ通さねば早や醒か井の宿をすぎ番馬の跡しはしとて多賀の御垣に奉幣し旅の疲れに皆人の老蘇の森と聞つれど勇む心ろの若やかよ寫る鏡の山見へて篠原わくる我袖ハ濡てそまされ下露の守山人の苅のこす下葉の草も春くれば色ぞまされる青柳の糸よりかくる琵琶の海ひく白浪のあと見れば霞て暮る春の日もはや入相になりしかバ勢多の橋場に旅宿を點じ其夜を明し給ひけり

○御伽草

○蛛の獨り言

風鈴の音がやみ三日月樣も御出かけよなりましたそろ〳〵巣を掛ませうと云ながら糸の先に下り。ハテ何處へかけやうか彼の梧桐の先より建仁寺垣の上へ掛ませう。これでよし〳〵。サア是からが忙しい元結屋と私しの商賣と同しとたと八重十文字よ巣をのけ眞中に大胡床をかき。ヤレ〳〵草臥ました。まづ蚊の二三匹引かゝつた彼の虻めも掛りそうな者だ。オット蝶か一羽くれハ食でか有ていひ。イヤ蜻蛉か掛つたどうして〳〵幾らもかひても最かないぬハテ顏ぢうか眼玉

虫けらそら藝術もて生活を立り況て人をや心し給へ

○草苅童べの歌

いつの頃にや武藏野の草苅童子はのらぞ一首の歌を讀しに恭しけなくも時の帝の叡聞に達しわいれの者よと御感賞ありしと。武藏野にをるべゑ花ハゑらわれど露でぬれゆくいくよいかれぬ。時の人田夫相應の名歌なりとてもてはやしたりと

○咄し

私しも一ッ咄しませう。或人が目黒の蛸藥師の茶屋で酒を呑とて肴ハ何かあると問たれば酢蛸さまか御坐りまそと云た時その客が。フウ酢蛸ハ聞へたが蛸樣とハ慇懃じやと云と。左

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

れば此處に蛸藥師樣は御ざり升ゆゑ蛸樣〳〵と樣づけに申しますと云ば客は是を聞てい。。か樣と云たればさゝてオツト待給へ其跡は否々鳥賊には樣を附ませんと云のであろう。其咄は古々と排撃ば咄し人は腹を立て人の咄の腰ををる人じやそんな愚地なとではない。いひ落が有が最咄すまひとすわれば。是は過つゝサア今の跡を聞ゝい咄し給へ。イヤモウ腰か折ては咄されぬ惜い咄じやがと云は。側から一人がろんなら最彼人には云ず私しに斗り咄し給へ。そうしてどうしましゝと云ば其人の耳へ口をつけて默つて居な。今の後は彼が云た通りた

◎机の塵

○筆のまに〳〵　六　　千束の里　美樹男

○伊勢物語作者考

伊勢物語作者の說は種々あれども皆定かならず先づ伊勢物語と名づけし心は契仲が說當を得たる樣なり臆斷抄に伊勢物語とは虛語物語といふ意なり鴨ノ長明が哥に〔伊勢人は僻言しけり津嶋より甲斐川ゆけば和泉野の原〕又西行法師〔伊勢人はひがとしけり小栗の篠にとあふで柴にてそなれ〕又忠房朝臣〔伊勢ならば僻事どとも思はまし大和なるてふ美作の池〕かく古言より伊勢人はひかことをいふといひ慣られせりされはあらぬ虛言を書きたる物ぞと作者の心ありて題したるなり亦加茂眞淵が古意てふ書には淸輔が袋草紙を引て曰く密事有るの故に僻事を搆ゆるの由と爲して伊勢物語と號く諺に伊勢は僻という故也と云云今昔物語に前略伊勢人は。いと心わろくて親子兄弟の物を互に掠めとり云云されば密事を作者の憚りて僻事物語といはん爲め伊勢といふ文字を冠らせし物ならん又伊勢の御の作ならぬ事は二條の后は延喜十年までおはしまし陽成上皇は御腹天暦三年に崩御ませり此御頃のあたりにありてさも密事を書にしものきあらはさんものかは后の御兄弟たちの時の勢をも必らず憚るべし云云業平の作ならぬことは自ら法を犯せし事を初冠より初めて終りにいたるまでに書終るべきかは其うへ新古の歌をなをして入れたるをや亦六條の宮の御撰などいへるも信づべからぬ由眞淵くはしく論ろへりおのれ美樹男。眞淵と同じ考へなり或人は業平が世をうらむことありてわざとしとけなく書き置かれしを子息滋春などの書繼かれしなどいへどいかで子として親のあられも爲き擧動を快ろよく筆をとりて書繼かんや亦伊勢の書繼きしといふ說は業平と贈答の歌有るをもて證とすれど此も枇杷左大臣仲平公の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

伊勢のもとへ通はれし事有ける故仲平公に贈答の歌多きなり然るをなかひらなりひら假名文字を誤まれるより終に此に及びしと古人既に論ひしが如く決して此者語は業平にもあらず亦伊勢の御にもあらず其伊勢物語と名付けしは契冲が説の如く虚語者語と言脱れん爲にして此作者は到底辨らず辨らねど業平や伊勢の御にはあらずまして滋春をや定家卿も其書の奥書に上古之人强て其人を尋ぬ可らずと特書し玉へり

◎内外雜報

◎西班牙國皇帝崩御の遺聞（承前）右了りて帳へ入御ありしが皇后の御言は深く諸臣を感動せしめたり夫より諸大臣は直にコロンヌ殿に參向し先帝の御遺骸は昨廿七日を以てパルドーの離宮（皇帝崩御の離宮）より馬德里府の皇居に遷し奉りしが皇后宮は豫て御隨從の御決心なりしに諸大臣は皆其の西班牙宮廷の慣例にあらざる旨を上申し再三其の不可を論爭せしが遂ひに御許容なく皇女と供に尊骸還宮式の供奉に加はらせ賜へり當時御柩車には八頭の馬を繫し國中の貴族之を圍繞し以て宮中に遷し奉れり

（以下次號）

舍告

地方愛讀諸君の中本誌第十號まで代價御拂入の分は最早本月二十日第三土曜日にて發送濟に付前金相切さる前御入金可被下候若し御送金無之に於ては發送見合候間豫て此段申上置き候也

會計掛啓白

但シ前號ニ三月六日ト掲載候ハ誤リニ付正誤ス

廣告

佛國女學士路易達爾克原著伊藤重固君譯
東京大學教授櫻井省三君閲山成哲造君校

西洋束髮秘傳 附 化粧秘傳　全一冊美本

密畫廿七入定價六十錢郵税共六十四錢

此書は西洋に名高き佛國風の束髮及化粧の秘法を示すものにて種々の束髮を自身に爲し得る法を説明し其他髮の療治法を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

數多傳授せり又化粧術は我邦にて思付さる奇術多し御講讀の上御試驗あらんことを乞ふ

東京神田雉子町

大賣捌所 團々社支店

○小學教文雜誌

大形美製 一冊二十頁 毎月三回發兌 定價一冊四錢

欄ヲ分チテ三トナス曰ク文話曰ク文英曰ク文範文話ハ唐宋諸家ハ固ヨリ論ナク吾邦先輩ニ至ルマデ苟モ作文賦詩ヲ資スル者ハ一切網羅シテ遺ス所ナシ文英ハ江湖靑年諸君ノ文詩歌ヲ掲載シ之ヲ改竄シ之ヲ批評シテ一ノ餘蘊ナカラシム文範ハ和漢古今ノ鴻儒碩學ノ文詩ヲ登録シ一々文法詩格ヲ講明シテ作文賦詩ノ要ヲ知ラシム加之時々歐文ヲ掲ゲ之ニ和譯ヲ施シテ譯文ノ要ヲ領得セシム又連月文詩歌ノ題ヲ課シ遍ク諸君ヲシテ之ヲ作爲セシメ其優等ノ者ヘハ無料ニテ壹部宛拜呈ス其編輯ノ精選ナル改竄ノ懇到ナル實ニ文海ノ指針文山ノ一杖トモ謂フベキ好書ナリ

本紙代價表

部數	本誌郵税價	郵券代用
五部	二十四錢	二十六錢
十部	四十七錢	五十二錢
二十部	九十錢	壹圓
三十部	壹圓三十錢	一圓四十三錢
壹年卅六部	壹圓五拾錢	一圓六十五錢

廣告一行代價

一行十九字詰	一日	二日以上五日迄	六日以上
自一行至十行	五錢	三錢	二錢五厘
自十一行至卅行	四錢	二錢五厘	二錢
卅一行以上	三錢五厘	二錢	一錢七厘

發兌 東京馬喰町貳丁目 興文社

小牧櫻泉先生序 藤野海南先生序 松村南涯先生著

○詩文用材 故事詳解 全一冊

定價郵税共廿四錢 郵券代用不苦

詩ヲ賦シ文ヲ作ルニハ典故ヲ解セザルベカラザルハ固ヨリ言ヲ竢タズ然ルニ世ニ典故ヲ解釋スルノ書甚タ少ク一二之アルモ粗漏杜撰概ヲ看ルニ足ラズ此書ハ南涯先生多年六經百家ノ書ニ就テ典故ヲ剔抉シ之ヲ乾坤時候等ノ部門ニ分チテ一々解釋ヲ施シタレハ典故ヲ搜索セント欲スル者ハ一タビ卷ヲ繙カハ地ニ俯シテ芥ヲ拾フヨリモ易カランコト實ニ文人韻士座右一日モ欠クベカラザルノ珍書ナリ

發兌書肆 東京馬喰町貳丁目 石川治兵衛

發行所 東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地 積文舍

持主兼印刷人 松本義弘

編輯人 山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地 大賣捌所 修正堂

同 神田區雉子町	團々社
同 日本橋區新葭町	良明堂
同 牛込肴町十七番地	活神堂
同 芝區愛宕下町二丁目	高槻堂
同 蠣壳町貳丁目	信文堂
同 本郷區本郷元富士町二番地	盛春堂關田
同 同本郷春木町貳丁目	解明堂
同 元數寄屋町壹丁目	東海堂
同 神田區淡路町	巖々堂
大坂府備後町四丁目	岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目	立興舍
藝州廣嶋大手町一丁目	早速社
江州彦根西内大工町	新々堂
陸前國仙台大町四丁目	木村文助
越後長岡裏三之町	大橋書房

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY